ロレンスのリーダーシップ・ノヴェルズについて
――『エアロンの杖』から『翼ある蛇』まで――

奥村　透

ロレンスの長篇小説のうち『エアロンの杖』(*Aaron's Rod*, 1922)、『カンガルー』(*Kangaroo*, 1923)、『翼ある蛇』(*The Plumed Serpent*, 1926) の三篇をふつうリーダーシップ・ノヴェルズ (leadership novels) と呼ぶ。この三篇は年代的には『恋する女たち』(*Women in Love*, 1920) と最後の長篇『チャタリー夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*, 1928) との間にはさまれており、ロレンスの思想上ひとつの重要な時期を画するものである。この時期は『虹』(*The Rainbow*, 1915) における、愛を通じての男女両性の自我の葛藤の追求を経たのち、『恋する女たち』において両性の自我を認めた上でその上に成りたつ調和ある均衡という、まことに苦しい結論を打出したロレンスが、この結論では満足できず、男女の愛という個人的な問題から、人生における開拓的活動という非個人的な問題へ、男女両性の平等から男性の女性に対する支配という関係へ、男女の関係よりも男同士の連帯という問題へ、関心を転じていった時期なのである。この事はほぼ同年代に書かれた『精神分析と無意識』(*Psychoanalysis and the Unconscious*, 1921)、『無意識の幻想』(*Fantasia of the Unconscious*, 1927) の二冊を読めばよくわかるのである。これらの中でロレンスは、男には女との関係の外に、それを超えた人生を開拓するという使命がある

こと、それがために男は女を捨てて、強力なリーダーのもとに結合する必要があること、男がそうした使命に打込んでこそ、妻との結婚生活もうまく行くことなどを繰返し述べている。たとえば次のように述べている。

もちろん両性の間には大きな平均があるべきである。男は昼間は自分の魂の最も偉大な衝動に従って、自己を生涯の仕事に捧げ、自己を死にさらさなければならない。男の最高のものを求めるのは女ではない。男を女を超えて彼の至上の活動へと駆りたてるのは、男自身の宗教的魂である。彼の最高のものについては男は神に対してのみ責任がある。彼は手をとめて、命を失うとか、妻や子供を捨てねばならぬなどということを想いだしてはいけない。彼はたとえ七つの世界が滅び、その中にすべての妻や子供たちが含まれていようとも、人生の旗を押し進めなければならない。かくてイエスの「女よ、私はお前になんの関係があるのか」という言葉が出たのである。生きているあらゆる男は、ひとたび彼の魂から来る仕事あるいは使命に向っている時には、妻や母にもう一度この言葉を言わねばならない。①

重ねて次のように述べている。

男は勇敢に自己の魂、人生の創造的前衛としての自己の責任を支持せねばならぬ。そして彼はまた女のもとへ帰り、女の深い性的呼びかけに対する完全な答えとなる勇気を持たねばならぬ。しかし彼はこの二つの問題を混同してはならぬ。本質的に何にも勝って男は常に人生の開拓者、自己の向うみずで何にも屈しない魂だけをもって、未知なるものへ進んでいく冒険者である。女は彼にとって日が沈んだ時、黄昏の炉辺にのみ存在する。夕べと夜は彼女のものである。……我々は離れて、ある情熱的な目的をもった男の偉大な結合に戻らねばならぬ。②

このようにロレンスは、人間行為のすべてをセックスに帰するフロイドの誤りを指摘し、人間行為のすべてはセックスではないことを強調している。セックスにおいては人間は個人であるが、この男の偉大な目的のためには、

男は個人を捧げねばならぬ、男はリーダーに従うか女に従うかの選択をなさねばならぬ、とロレンスは言う。しかし彼は女との関係を無視しているのではない。男同士の仕事がうまく行くためには、セックスの満足がなければならぬ。「諸君は諸君の偉大な目的的活動を、すべての個人の強烈な性的満足に基礎を置かねばならない。」とロレンスは言う。しかし後者は前者に従属するものでなければならない。

また万物はすべて他との相関関係において成りたつと述べたあと、次のように言っている。

次の関係は、計り知ることの出来ぬ信頼と責任と奉仕と指導と従順と純粋な権威の精神における、人間対人間の関係でなければならぬ。人間は指導者を選び、死ぬまでそれに従わねばならぬ。そしてそれは頂点に達する貴族主義、ちょうどピラミッドのように至上の指導者へと先細りしていく社会の体制でなければならぬ。③

また次のようにも述べている。

諸君は魂に新しい決意をし、古い生活態度から離れねばならぬ。諸君は自分が男であることを知らねばならぬ。そして男であるという事は、諸君が道を切り開いて、古い世界から新しい世界へ出るために、ひとり女の先を行かねばならぬことを意味する。そして諸君はひとりでなければならぬ。諸君は前進せねばならぬ。そしてどちらの方向をとるかわからない時には、諸君の心が指し示す男を探せ。そしてついて行くのだ。そして決して振返ってはならぬ。なぜなら、もしロトの妻が振返って塩の柱を振りむいたら、あわれな男たちはいつも指導を求めて女を振返り、あわれな半ば腐った涙の柱となるからだ。

諸君は女に諸君を真の開拓者として信じさせるよう、闘わねばならない。男は女にとって開拓者でないかぎり男ではない。諸君は女にその目標を諸君の目標に従わせるよう、更に激しく闘わねばならない。女の夜の目標を諸君の昼の目標に。④

以上の引用でロレンスのリーダーシップの考えがどのようなものか明らかになったであろう。ここには男性の自我の女性の自我に対する優越、男同士の結合による人生開拓の使命、それを導くリーダーへの待望などが見られる。これは従来愛を通じての男女の自我の闘いのみにこだわっていたロレンスからみれば、思想上の顕著な発展と考えられる。こうして男が男の使命に打込んではじめて、夜妻と共にする生活はより充実したものになるとロレンスは言う。

妻が諸君を信じ、彼女の及ばぬ諸君の目的に従う時、妻のもとへ帰るのはなんとよいことであろう。その時こそこの日没がなんと素晴らしいであろう。疲れてその日の重荷を血管のなかにもって家へ帰ってくる時、諸君はなんと充ちたりて感ずるだろう。その時諸君はまた他の目標、彼女の腕の中にある闇のすばらしさに帰るのである。そして諸君の目標が諸君のためそこにあることを知る。その感じはなんと充ちたりたものであろう。そして諸君は、諸君を愛し、諸君の目的を信じ、諸君を抱擁の壮大な闇の満足へと迎える女に、計り知れぬ感謝を感ずるだろう。それが妻を持つことの意義である。[5]

これが現実であったならば、ロレンスにとっては理想の境地であったろう。しかし三篇のリーダーシップ・ノヴェルズを読む時、私はマリ(John Middleton Murry)[6]同様これが現実であったとは信じえない。ロレンスは『無意識の幻想』で述べているように、妻を捨てて男同士の偉大な運動に身を投じることが出来なかった。現実の彼は背後に妻の存在なくしては生きられず、妻を服従させるどころか、依然として自我の優劣を争って、妻と闘いをつづけねばならなかった。マリのいうように、男同士の活動の基礎となるべき妻との夫婦関係においても、彼は決して妻を満足させえていなかったようである。むしろ彼の説く男同士の活動は、妻との夫婦関係における敗

北からの逃避の手段であり、『恋する女たち』における、男女両性の自我を認めた上で、その上に成りたつ調和ある均衡という結論が、ロレンスの願望充足（wish-fulfilment）であったのと同様、このリーダーシップの考えも彼の願望充足であったと認めざるを得ないのである。もちろん彼の考えが真剣なものであり、彼が必死にこの結論を信じようとしていたことは疑えない。ただ残念なるかな、彼の宿命がそれを可能ならしめなかったのである。リーダーシップの考えが彼の願望充足であったらしいことは、先に挙げた三篇の小説を読めば明らかであるし、彼自身『チャタリー夫人の恋人』を書く頃には、リーダーシップの考えの誤りを認めているのである。[7] そしてこの最後の長篇小説では、男女の「やさしさ」（tenderness）による肉体の復活という主題を打ちだしている。そういう意味で、『恋する女たち』と『チャタリー夫人の恋人』との間にはさまれた三篇のリーダーシップ・ノヴェルズは、ロレンスの思想の発展の過渡的時期を代表するものとして、見のがすことの出来ぬものである。私は以下これら三篇を年代順に考察することにより、リーダーシップの考えがなぜ作者の願望充足に終ったかを探ってみることにしたい。

リーダーシップ・ノヴェルズの特徴は前述したごとく、男性の女性に対する自我の優越、男同士の関係の重視の二つであるが、『エアロンの杖』もその例に洩れない。この小説はイギリスの炭坑の重量計りのエアロン・シッソン（Aaron Sisson）が、あるクリスマス・イヴに子供のクリスマス・ツリーを飾るろうそくを買いに出たまま、妻子を置いて家出するところから始まる。現在の言葉で言えば蒸発である。彼は数日後の夜雨の中を帰って来、小屋の中から我が家の様子をうかがう。娘のマージョリー（Marjory）が病気らしく、医者が来ているのをみて罪の意識を感じるが、彼の決心は変らず、フルートとピッコロの入った手さげ鞄をこっそり取出し、ふたたび飄然と旅に出てしまう。彼はなぜ妻子を捨てたのかとの問いに、「私は自分のまわりに少し自由な余地がほしかった

からだ」と答える。つまり彼の家出は、妻と家庭に対する消極的レジスタンスなのである。彼はロンドンで、オーケストラのフルート奏者として生活をたてているうちに、作家のロードン・リリー(Rawdon Lilly)という男と知りあう。リリーは作者ロレンスの分身であって、彼とエアロンとの間に固い男同士の友情が結ばれる。特に第九章でエアロンが下宿の前で意識を失って倒れているのをリリーが発見し、自分の部屋へ運び入れ、油を塗ってマッサージして回復させる場面では、ロレンスの小説によく出てくる男同士の血の絆(blood brotherhood)の例がみられる。リリーはエアロンにとってリーダーなのである。この章で二人の語る女性観は、リーダーシップ・ノヴェルズの所以をなすものであり、『無意識の幻想』の考え方と同じものである。すなわち結婚において、女性は子供という武器を利して完全に男性を支配し、男性は唯々として従属の立場に甘んじている。男性の欲求はまず自らの快楽にあるので、子供を生むことではない。男性はすべからく起ちあがって、自己の立場を回復し、男性の優位を女性に認めさせねばならないというのである。第十一章でも同じ考え方が主張される。

愛という幻想は永久に去ってしまった。愛は互いが相手の魂を支配しようとして争う闘いであった。これまで男は女の支配に負けてきた。今こそ男はそれを取戻そうと闘っている。そしてもはや遅すぎる。なぜなら女は決して譲ろうとしないから。

しかし女が譲ろうが譲るまいが、男は自己の魂と良心と行動の支配権を保持するだろう。男は二度と女の判断に譲ることはないだろう。男は自己を永遠に女の裁きの彼方に保持するだろう。

従って二人の生活ではなくて、ひとりの生活になるのだ。

……ひとりでいること、自分自身になること、追いたてられ、犯されて自己でない何かにならないこと。まさしくこれこそ何にも勝るものだろう。[8]

明らかにこれは、もはや『恋する女たち』における、両性の自我を認めた上でその上に成りたつ調和ある均衡といった理想ではない。また男同士の結合による、人生の開拓的活動という理想とも程遠いものである。ここには女の自我に対する男の優越を叫び、女を屈服せしめようとする必死のあがきがあるのみである。これで『恋する女たち』における、理想的な結論が現実ではなく、ロレンスの願望充足であったことが明らかとなる。と同時に、この男の優越の主張も果して現実のものであるか、甚だ疑わしくなるのである。マリは辛らつな分析によって、この作品の否定的な面を証明している。[9]

第十一章でエアロンはふたたびわが家に戻るが、妻から今まで妻子を捨てていたことを詫びよと迫られると、詫びる気にはなれず、再び放浪の旅に出てしまう。そしてリリーを追って、イタリアのノヴァラ(Novara)という町にやって来る。以後舞台はイタリアに移るが、その背景はロレンス自身のイタリア旅行の体験に基づいて描かれている。エアロンは更にミラノからフローレンスへと放浪の旅をつづける。エアロンはイタリアへ来てはじめて、自己が解放され、古い自己すなわちイギリスにいた自己から脱し、自分が新しい自己に生まれかわったような解放感を味わう。エアロンはフローレンスでデル・トルレ侯爵夫人(Marchesa del Torre)という上流婦人と知りあい、関係を結ぶが、それはあくまで欲情満足のためであって、恋愛感情を含むものではない。ここにも男性の女性に対する支配の関係がみられる。小説の終りちかくアナーキストの投げた爆弾で、エアロンの杖であるフルートがこわれ、彼はそれを川へ捨てる。リリーは、君はこれから杖なしに生きていかねばならないと言う。今やエアロンの従うものはリリーだけである。そのリリーは言う。人生には二つの大きなダイナミックな衝動として、愛(love)と力(power)がある。人間は女やヒューマニティや神に没頭しても、自己を完全に失なうことはできない。真に頼りうるのは自己のみであって、自己をのぞいてはゴールもなければ神もない。自己を成長発展さ

せることによって、運命が開ける。魂のうちにある自己を裏切ってはならない。自己の責任を回避してはならない。愛は手段であり、目的ではない。唯一の目的は自我の達成である。男が従来の love-mode から自由になり、力の大きな衝動がその中を流れはじめると、女は自然男に従うものである。しかしそれは奴隷的な屈従ではなく、更に深い自由な譲歩である。それは個人の中にひそむ power-soul への屈従である。男は自己より偉大な英雄的精神に従い、女は男の中にある power-soul に従う。これが新しい love-mode である。このリリーの主張にみられるのは、愛からリーダーシップへの考えの転換である。小説の最後でエアロンが「では私は誰に従えばよいのですか」と尋ねるに対し、リリーは「それは君の魂が教えてくれるだろう」と答える。つまりこの小説は、リーダーシップがどういう具体的な形をとるかには触れられずに終っている。この問題に対する解答は、次の『カンガルー』と『翼ある蛇』を待たねばならない。

『カンガルー』では舞台はイタリアからオーストラリアへ移る。これまたロレンス自身の体験を背景としている。小説はロレンス夫妻の分身とみられる、リチャード・ロバット・ソマーズ(Richard Lovat Somers) とハリエット(Harriet) の夫妻がシドニー港に着き、トレスティン(Torestin) という住居に落着くところから始まる。彼等はヨーロッパの生活にみきりをつけ、新生活を夢みてオーストラリアにやって来たのである。彼等は隣家のジャック・コールコット (Jack Callcot) 夫妻と交際するようになる。この夫婦はヨーロッパにおける夫婦とちがって、互いに相手を征服しようとせず、結婚という拘束以外は互いに自由を認めあっている。ハリエットは、人気を離れた海岸で二人だけの生活をしようというが、ソマーズは「私はもうしばらく人間および人間社会と闘わねばならぬ。それが終ったらお前のいうようにしよう」と言う。つまり彼は人間世界に働きかける積極的な意欲を持っているのだ。そして彼等はジャックを通じて、在郷軍人会クラブ (diggers) の首領でベンジャミン・クーリー

(Benjamin Cooley)、通称カンガルーという人物に紹介される。この団体は各州に支部を持ち、やがては政治権力をにぎり、革命を起すことを目論んでいる。夫妻はまた、ジャックの妹の夫であるウィリアム・ジェイムズ(William James)、通称ジャズ(Jaz)によって、キャンベラ・ハウスの社会主義者の指導者ウィリー・ストラッサーズ(Willie Struthers)にひき合わされる。ソマーズはこれらの社会運動に興味を示すが、これは男同士の問題として、ハリエットが加わることを許さない。すなわち前作『エアロンの杖』ではエアロンとリリーの間に存在した男対男の関係が、この作品ではソマーズとジャック、カンガルー、ソマーズとジャズ、ウィリー・ストラッサーズという政治運動となって現れるのである。ソマーズさえその気になれば、これらのグループに加わって、いくらでも活躍することが出来るのだ。一方ソマーズ対ハリエットの夫婦関係は、ハリエット・ロバット号という船にたとえられて描かれる。この船は互いに自己の進まんとする方向をめざして、右へ左へ死滅の境をさまよっている。ロバットは「まことの恋人」(true lover)の旗を掲げた古い船を焼き、不死鳥の旗、すなわち"lord and master"の旗を掲げた新しい船を造ろうというが、ハリエットは反対する。

> 彼は完全な愛という旗を下げて、ハリエット・ロバット号に火をかけて、自分が復活した不死鳥のように、頭に空想の冠をいただいて、燃えかすの上に栄光にみちて坐ることを望んだ。[10]

しかしハリエットは、彼女なしに独立しえぬロバットを、どうして信ずることが出来ようと思う。

> 彼には究極のところ彼女以外に何もなかった。そしてそれゆえにこそ、恐らく彼は彼女に対する支配権を確立し、専横の態度をとろうとしたのであった。[11]

ソマーズの矛盾と弱点は明白である。彼はこれまでのロレンスの小説の主人公がそうであったように、背後に女(母または妻)の存在なくして生きていけぬ男である。彼はその弱点を隠すために、男性の女性に対する優越を説き、男同士の協力による社会的な行動を主張したのであった。しかし彼の弱点を知っているハリエットは、納得しようとしない。やむをえずソマーズは、「闇の神」(a dark Lord and Master)という神秘的な力を持ちだして、躍起となってハリエットを従わそうとするのである。しかしこの神秘的な「闇の神」が彼のひとりよがりのものであり、彼のいう男の女に対する優越、男同士のイムパーソナルな活動が、しょせんロレンスの願望充足であったらしいことは疑いの余地がない。

そのような矛盾をはらんだソマーズが、究極的に政治活動へ跳びこんでいけないのは当然である。彼はジャックに好意は持ちながら、彼等の運動に同調することが出来なかった。

> そして真の良友が与えられた今、彼は単なる友情にさえ自分を投じていくことが出来なかった。この愛情、この混りあい、この親しさ、この真に美しい愛のすべての傾向、彼は自分の魂がそれに反撥しているのを知った。彼はやっていくことが出来なかった。彼は友を欲しなかった。彼は愛する愛情を欲しなかった。彼は団結を欲しなかった。[12]

ロレンスはしょせん思索する個人主義者で、彼の社会運動への参加には限界があった。ソマーズの欲するのは、"the mystery of lordship"という神秘的なものであった。カンガルーは、自分のやろうとすることは人間の心の中にある"fire of love"を結集して燃やすことだというが、ソマーズには人類愛も心の炎もたわ言としか思えず、そうした人間世界への愛着から離れて、ひとり大海を泳ぐ魚のような、「ある氷のような実存と荒々しい魚のような強欲さ」(a certain icy existence and wild, fish-like rapacity)に惹かれる。第七章「論戦」では、カ

ンガルーとソマーズとの間に激しい論争が交わされる。ウィリアム・ジェイムズは、カンガルーはオーストラリアを新エルサレムにしようとしていると言い、彼が共産党およびあらゆる労働者組織を集合すればよいとも言い、ソマーズがカンガルーに協力して革命へ向わせるべきだという。しかしソマーズは、人間社会というものは震災後のメッシナと同じで、革命をやってもそのあとではまた醜くなるものだから、けっきょくは神に委す外に途はないという。つまり彼は革命を信ずることが出来ないのだ。ハリエットは、男が自分の志す仕事に専心するのはいいが、その根柢には夫と妻との間に結ばれた、“an unconscious, vital connection”がなければならぬと考え、革命論議に夢中になっている夫を批判し、ソマーズもうしろめたさを感ずる。

第十一章ではソマーズがキャンベラ・ハウスを訪ねて、ウィリー・ストラッサーズと会う。ソマーズはどこの国においても、社会主義者には革命を起すだけの勇気がないと話し、ストラッサーズに革命を指導することは出来まいという。これに対しストラッサーズは漸進的な前進を説き、それがためには労働者相互間の新しい信頼と結びつきが必要だと主張する。そしてソマーズに、労働者の新聞を発行することにより、彼等に新しい精神を鼓吹してくれるよう協力を切望する。がソマーズは、やはり自分は他人や社会のことなどに関心を持っていないのだと悟る。そして社会主義や人間救済の問題からのがれて来たことに、わなを脱したような解放感を味わう。そして真に人間の結びつきをなしとげるには、その“sensual passion of love”を“great dark God”に帰一すべきだと考える。こうして彼は、社会主義へも身を投じていくことが出来ない。

第十六章では、ソマーズはキャンベラ・ホールで行われた労働者大会に出席する。ストラッサーズの演説中、在郷軍人の一群が野次を入れたことから会場は紛糾し、カンガルーが銃で射たれるという事件が起きる。ソマーズはカンガルーを病床に見舞うが、瀕死の彼が「愛している」と言ってくれとせがむが、ソマーズはその言葉を

口にすることが出来ない。カンガルーは「お前が俺を殺したんだ」と叫んで死んでいく。ソマーズ夫妻もオーストラリアをあとにアメリカへ向う。

以上見てきたように、ソマーズの男同士の協力による運動への試みはみごと失敗に終る。結果は協力どころか、彼の人間からの疎外を深めただけであった。彼は自己だけを守り、闇の神への信仰に唯一の生きる途を見出そうとする。この神秘主義は、次の『翼ある蛇』で頂点に達する。『カンガルー』の意味は、男同士のリーダーシップが政治運動という具体的な形をとり、その失敗が実証された点にあるといえる。ロレンスのリーダーシップの主張は、疑う余地なく彼の願望充足であった。

『翼ある蛇』では舞台はメキシコに移り、リーダーシップが宗教運動という形をとって現れる。この作品には、ロレンスの直接の分身と考えられる人物は登場せず、ヒロインはケイト・レスリー(Kate Leslie)という四十歳になるアイルランド女性である。彼女は若くして結婚し、一男一女を生んだのち離婚し、アイルランド独立の運動家ジェイムズ・ジョワキム・レスリー(James Joachim Leslie)と再婚し、夫に死なれて今は未亡人となっている。死んだ夫のジョワキムは彼女をかえりみず、アイルランド独立の政治運動に没頭した男で、やはり男のリーダーシップに殉じた男であった。そしてケイトはそうした夫に不満を持ち、批判的であった。ここにも男のリーダーシップに献身する夫と、それに批判的な妻の対立が見られる。

ケイトは新聞で、「古代の神メキシコへ帰る」という記事を読み、その場所のサユラ(Sayula)湖へ行くことにする。彼女もまたヨーロッパの機械文明にみきりをつけ、神秘な底しれぬものをひそませているメキシコに、何か未知なるものを探ろうとするのである。サユラ湖畔へ着いて彼女の見たものは、キリスト以前の古代メキシコの神、ケツァルコアツル(Quetzalcoatl)の再臨を信ずる村人たちが、半裸で火をたき、そのまわりを囲んで太鼓

を叩き、神秘な呪文を唱えながら、奇妙な踊りを踊っている場面であった。ケイトはこの奇妙な音楽を聴いているうちに、現在をこえて、時間そのものの中心に魂が戻っていくような感じがして、否定しがたい運命的な力を感ずる。また半裸の土人たちの肉体に、白人に見られない不思議な魅力を感じ、彼等の間にこそ永遠に燃える生命の火の中心があると思う。

このケツァルコアツルの神を自称し、この宗教運動を指導しているのがドン・ラモン（Don Ramon）という男で、彼は人間は今や神を失っているとし、新しい救世主が現れて、神と人間のあいだに新しい結びつきを創り出さねばならぬ、革命で騒然としているメキシコに、新しい生命をもたらさねばならぬと言う。ケイトはラモンの農場を訪ねるが、ラモンの妻ドーナ・カーロッタ(Dona Carlota)は夫の宗教運動を否定し、彼のやっていることは権力を求め、自ら神として尊敬されたいという男の虚栄にすぎぬと語る。ここにも男のリーダーシップに打ちこむ夫と、それを批判する妻という、リーダーシップ・ノヴェルズに共通なパターンが見られる。やがてラモンが現れるが、彼は二人の女性とは隔絶された世界にいるようである。彼は村人を集めて、太鼓を叩いて歌い、説教をする。彼にはドン・シプリアーノ（Don Cipriano）という協力者がおり、フィッツィロポクツリ（Huitzilopochtli）の神を自称している。彼等二人の間には、宗教を通じての男同士の強固な連帯がある。シプリアーノはラモンを讃美し、ケイトに自分と結婚して、メキシコに留まるようにと勧める。

やがてキリスト教による妨害が始まる。ラモンとシプリアーノはキリスト教の僧正に会い、ケツァルコアツルの信仰以外に、無気力なメキシコ大衆を救うことは出来ぬと主張する。更にラモンは世界宗教の必要を説き協調を求めるが、老僧正はかたくなに拒む。第十八章では教会からキリストの像が運び出され、他の聖者たちの像や十字架とともに「さそりの島」(Island of Scorpions)へ運ばれ、そこで焼かれる。第十九章ではラモンが刺客に

襲われ、傷をおう。

ケイトは最初はシプリアーノとの結婚を断っていたが、彼の奥底にあって彼女を魅する、不思議な魔力に屈服してしまう。彼との結婚は、完全に彼の膝下に組敷かれ、絶対の服従を余儀なくされることである。彼等はラモンの司祭のもとに結婚式を行なう。ここでもまたロレンスは、男性による女性の支配という願望を、神秘の世界で満足させようとしている。現実で果しえぬこの願望を満足させるには、ロレンスはこうした方法をとるより外に仕様がなかったのである。

第二十一章ではラモンがケツァルコアツルの再臨を宣言し、信者たちとともに教会へ入り、「我こそ生きたケツァルコアツルなり」と宣言する。この祭式の真最中、女の群の間から張りさけるような声で反対を叫んだものがあったが、それは妻のカーロッタであった。敬虔なキリスト教信者である彼女はキリストの名を呼び、ラモンの命を断って、彼の魂を救ってくれと絶叫する。気絶した彼女はベッドに運びこまれ、瀕死の床で聖餐を求めるが、シプリアーノは、あなたは夫や子供から求めるばかりで、自ら与えることをしなかったといって非難する。やがて彼女は死に、母の手ひとつで育てられた二人の子供はラモンになじまず、叔母につれられて、アメリカの学校へと帰っていく。ラモンは、お前たちが大人になって父を理解し、側へ来たいと思うようになったらいつでも来いといって二人を送り出す。ここにもまた、夫のリーダーシップの犠牲となった妻の姿が見られる。ラモンの関心は専ら宗教運動にあり、妻との結婚生活は全くかえりみられていない。

ケイトは、ラモンとシプリアーノの持つ「男の意思」に魅されながら、心のどこかで反撥している。強力な神の意思と、それに応える男の意思の間にあって、女はまるで従的な位置しか与えられていないからだ。シプリアーノに抱かれ、受身の喜びを感じながらも、彼女の中には彼女自身の自我があった。しかし男はそれを認めよう

としない。ケイトは、個人は幻影にすぎないのだろうかと煩悶する。西洋の女ケイトにとっては、両性の自我は平等であるべきだった。しかしけっきょく、彼女はシプリアーノの花嫁として、マリンツイ(Malintzi)という称号を与えられる。

カーロッタの死後二ケ月ばかりして、ラモンはテレサ(Teresa)という娘と再婚する。彼女はケイトやカーロッタとちがって、完全に男の支配に甘んじている女として描かれている。ケイトは、テレサが男のために完全に自我を投げだしていることに我慢がならない。やはりケイトには、自分の自我がなければならなかったのである。ケイトは、ラモンが運動で疲れはてて帰ってくるのを見て、くだらぬ大衆のために身を捧げ、その結果傷つき敗れて妻のもとへ帰ってくる男を空しいものに思う。そして夫のためすべてを捧げて悔いないテレサを軽蔑しつつ、一方ではそれを羨しく思う気持を隠しきれない。ケイトはヨーロッパへ帰るかメキシコに留まるか、二つの選択に迷っている。しかし彼女は正式にシプリアーノと結婚することにより、人生の表面を離れ、地下ふかく臥っているような全き休息を感ずる。彼女の昔の激しい情欲もおさまり、シプリアーノもそうした恍惚の満足を避けるようにした。二人の性交には、恍惚の叫びを発するあのクライマックスはなかった。ケイトは一旦サウザムプトンまでの船室を予約するが、けっきょくこの地に残ることをシプリアーノに告げる。

このようにして、自我を主張するケイトもついに男の支配に屈した形で、この小説は終っている。これこそロレンスにとってはまことに都合のよい、彼の願望を充足する結果であった。しかしこうした結果を、現実のものと信ずることがどうして出来よう。ロレンスは男の女に対する支配、リーダーシップの主張を、メキシコの古い神という超理性的な次元において、実現しようとしたに外ならない。神秘のヴェールに包まれている点では、『カンガルー』をはるかに上まわる。ロレンスの願望充足は、ついにこのような形をとるまでに追いつめられた

と言ってよいであろう。マリはこの作品を論じた章に「死」(Death)という題名をつけ、その否定的な面を徹底的に論じている。[13]

以上三つの作品を通じて見てきた特徴は、男性による女性の支配、男同士の協力によるイムパーソナルな運動であった。ロレンスはこれらの主張により、男性を支配するような女性の強い自我を抑え、男の主権を確立しようとしたのである。我々はその真剣さを疑うことは出来ない。しかしロレンスが如何にしても隠しきれないのは、それが現実でなく、彼の願望充足であったということである。それが証拠に、のちの書簡では彼はリーダーシップの主張が誤りだったことを認め、最後の長篇『チャタリー夫人の恋人』では、男女両性の優しさによる生命の復活を、テーマとしてうち出している。しかしそうかといって、リーダーシップ・ノヴェルズの存在意義がないわけではない。この時期はロレンスの思想遍歴の過程で、経なければならないひとつの関門だったといえる。人間関係のあり方の追求を生涯の課題とし、母の異常な愛情をうけて育ち、フリーダという強い自我の持主を妻とした男ロレンスとしては、当然通りぬけねばならぬ関門であった。つねに背後に女の存在なしには生きられぬ、「女の息子」たる彼にとっては、その弱味を隠すためにも、女の自我を抑え、男の優位を確立せねばならなかった。男女間の愛の問題をこえて、男同士の開拓的な運動に身を捧げる必要があった。しかし現実の彼は、男の優越を実現するには、余りにも女の存在に依存しすぎていた。男同士の連帯を実現するには、彼は余りにも個人主義者でありすぎたのである。けっきょく彼は、政治運動に身を投ずることが出来なかった。古代メキシコの神という神秘の世界に、存在の拠りどころを求めるしか途がなかったのである。彼の願望と現実の間には、余りにも隔りがありすぎた。彼のリーダーシップの主張が願望充足に終ったゆえんである。しかし彼がこの関門を経てはじめて、『チャタリー夫人の恋人』の心境に到ったことは、心に留めておかねばなるまい。

〔注〕

㉑ D.H.Lawrence: *Fantasia of the Unconscious* (The Viking Press), p. 135.

㉒ *Ibid.*, pp. 143–4.

㉓ *Ibid.*, p. 210.

㉔ *Ibid.*, p. 218.

㉕ *Ibid.*, p. 219.

㉖ *Cf.* John Middleton Murry: *Son of Woman* (Jonathan Cape), pp. 194–5.

㉗ 拙論『肉体の復活—「チャタリー夫人の恋人」』(『英文学試論』第三十集 pp. 51–63) を参照されたい。

㉘ D. H. Lawrence: *Aaron's Rod* (Heinemann), p. 123.

㉙ John Middleton Murry: *Son of Woman*, pp. 199–224.

㉚ D. H. Lawrence: *Kangaroo* (Heinemann), p. 176.

㉛ *Ibid.*, p. 177.

㉜ *Ibid.*, p. 104.

㉝ *Cf.* John Middleton Murry: *Son of Woman*, pp. 303–324.